

女三代の歴史を振り返る

綿谷 信子

昭和一五（一九四〇）年生まれ
野火止在住

商人の血を引く農家で

私が生まれたのは片山村の畑中宇島袋で、昭和一五（一九四〇）年。六人兄弟の長女です。家の周辺は畑で、今の新座霊園（市営墓園）の下のほうはずっと田んぼでした。湧き水もあつて水はきれいでした。

父は、ここに家を建ててから三代目で、祖父の代までは馬方、今でいう運送業でした。ご近所の野菜を九段や神田の市場などに運んだり、伸銅工場の製品を運ぶ仕事をしていました。

でも、昭和の初め頃、自動車が普及し

ていく兆しが見え始めたときに、祖父の一番下の弟は免許証を取りましたが、ほかの兄弟は馬鹿にしていたそうで、時代になり遅れてしまったんです。私の家は、父の代には農家でした。

私の叔父は、戦後、杉並や中野のご家庭に野菜を売って、帰りにお便所の下肥をもらってきたりして、現金収入の乏しい農家の人たちにたいへん喜ばれたそうです。

農地はどれくらいあつたのかしら。スイカ畑だけで一町あつて、朝など畑に出ると、先がかすんで見えないくらいスイカ畑が広がっていました。夏休みには、

畑のなかに建てた小屋で、子どもたちでスイカ番をしました。スイカは食べ放題、宿題を持って友達が遊びに来る楽しいひとときでした。

こういう植え方をする農家はご近所にはなくて、やはり商人の血を引いていたんでしょうね。オート三輪を買って市場に持って行くのも、ほかの家より早かったようです。手伝いや住み込みの人がいつも五〜六人いましたし、近所の人に頼むこともありました。

かまどに藁でご飯を炊く

私は昭和一五年生まれですから、幼い

頃の記憶といっても戦争が終わってからです。小学校は片山小学校です。今の片山小学校の場所に、校庭をはさんで小学校と中学校があつたんですよ。

母も父と一緒に畑に出ていました。私は長女でしたから、おばあちゃんのお手伝いで、小学生の頃から家事全般をやりました。私の家の庭は子どもたちの遊び場になっていて、ほかの子どもは鬼ごっこやかくれんぼうをしているのに、私は時間になるとご飯と味噌汁を作っておかなくてはいけません。

その頃、まきを使うのはお風呂くらいで、ご飯は「かま屋」という小屋にあるかまどで、藁で炊きました。それで、藁をグツと縛って、ぼんぼんぼんとかまどにくべて、燃えている間に外に飛び出して遊んだりしました。

ご飯は一回に三升くらい炊いたのかしら。いつも十数人いて、今と違っておかずが少ないから、ご飯をたくさん食べた。つばのある大きなお釜です。

すぐ下の妹は、遊んでいるときもいつも弟をおぶっていました。それで、「私の

背が伸びなかったのは、そのせいだ」って。どこのおうちでも、忙しいときは子どもも働いていたと思います。

お正月やお祭りでは

お正月の三日間は男の人がお雑煮を作つて、表向きは女の人家事をしないことになっていました。暮れからの大掃除とか、しめなわ作りとか、みんな男の人です。「男は神事、女は仏事」と言われて、お正月は神事だからでしょうね。

うちには神様や仏様がいっぱいあつて、それを磨くのも男の人です。観音様のおやしろが裏庭にあつて、お稻荷様は自宅の間の囲炉裏の上。お不動様は、ほかの家では台所ですが、うちは、この家を建てた方の守り神がお不動様だったので、床の間にありました。珍しいですよ、ね、ふつうは天照大神ですのね。

お正月には男の人がお供えに歩きました。ふだんは「お稻荷様の日」とか「お不動様の日」とかあつて、子どもたちが神様、仏様を回つてご飯をあげに行きまし

た。夕方、裏庭に行くのが恐くて、弟や妹と一緒に歩きました。

あとは平林寺の半僧様も楽しかったですよ。この日は学校が半ドンになりました。境内にもずっと店が出て、家族で行つて、おだんごや、こんにやくのおでんを食べたり。子どもたちはお小遣いをもつて、出店を見て歩きました。

町内のお祭りは、東福寺の隣にある牛頭（ごず）天王をまつた天王様のお祭り。ところどころに宿（やど）があつて、お酒やごちそうを用意してお神輿（みこし）をかつぐ人にふるまいました。ごちそうはてんぷらとか煮物とかおにぎりと、夏ですからスイカとか、そんなものですけど。お酒をいっぱい飲むことが大事だったようです。ごちそうのいい宿の前ではワッショイワッショイの揉みがよくつたとかいう話です。

畑中には原ヶ谷戸にお不動様があつて、小学生の頃でしたが、そこにお芝居がかりました。そのときも出店が出て楽しかったです。朝霞の氷川神社にも行きました。片山や馬場や道場は近いけど、お

祭りに行った記憶はありませんね。

盆踊りは片山小学校の庭で、婦人会と青年団が合同で主催して、盛大でした。踊ったのは炭坑節とか東京音頭。踊りの合間に、その頃流行っていた『おーい中村君』の歌などを流して、それも嬉しかった。蓄音機が普通の家にはなかった頃で、ラジオで聞くだけでしたから。

お盆の行事と長男の嫁

八月一日が「ぼんこ」と言って盆の入りです。お寺様に「ぼんこ料」というお布施をお届けに行くんです。私が子どもの頃はお米や小麦粉や野菜でした。お塔婆もこの日に頼みます。ぼんこはお金がかかる日なんです。

そして一三日の夜にお迎えに行きます。うちは先祖が馬場なので、最初は表門から出て馬場のほうに少し行きます。提灯に灯りをつけて「お迎えに来ました。お入りください」と言って、「ああ、重くなつた、重くなつた」と言いながら、うちに帰ります。そうすると女の人、お母さんやおばあちゃんが待っていて、その灯り、

つまり仏様から火をもらってお線香をつけます。

その火を持って、今度は裏口から出て、裏の山の上にあるお墓にお迎えに行きます。本家だから親戚がおおぜい来て、ぞろぞろと山の上のお墓まで行ったこともありすが、たいていは途中で「お入りください」と言って帰ってきます。「提灯を落とすんじゃないよ。仏様が痛がるぞ」なんて言われました。連れて帰って、その灯りでまたお線香をつけて、仏様の前でごちそうを食べます。

それが大変で、うどんにてんぷらをつけて、葉味もネギやミョウガなどをたくさん刻んで、だれがいつ来てもいいように準備します。一三日はおはぎ、一四日はおまんじゅうで、一五日はおだんご。一五日の夜に仏様を送っていくんですが、皆に食べさせてお土産も付けなければならぬから、女の人は大変でした。

そのときの母が嫌いだったの。いらいらして怒るの。実家に帰りがたかったんでしようね。でも長男の嫁だから帰るわけにいかないでしょ。どうでもいいような

ことで怒っていました。

父の妹が昔沢に嫁いでいたんですけど、長男の嫁なので帰れない。それで、おじいちゃんが亡くなったばかりのお盆に、用事をつくって迎えをやったらいいんです。実家から婚家に帰ったら、「何の用事だったのか」と聞かれて、「新しい仏様にお線香の一本もあげられなくてはかわいそうだから、迎えをよこしてくれ」と正直に言ったら、「そのために春と秋の両彼岸があるんだ」って諭されたそうなんです。長男のお嫁さんは絶対に抜けれなかったの。

行事のうどんと普段のおかず

お正月、お彼岸、命日、七五三、どんな行事にも、うどんは付きものでした。お客様がお昼前に着けば、「早く家を出てきたんだろう」と、まず「おしのぎ」にうどんを出す。お昼もうどんとてんぷらです。

てんぷらに入れるのは野菜で、ゴボウ、ニンジン、タマネギ、サツマイモ。おしやれな家では干しエビを入れたり、スル

メを水に浸して千切りにしたり。かつお節をちよつと入れると一味違うとか。チワワのてんぷらもごちそうでした。

ふだんの食事で、おかずは何を食べていたのかしら。海のは行商で買うしかなかったので、イカは赤いものだと思っていました。膝折まで行けば、宿場町だったのでお店もありましたが、近所では原ヶ谷戸に「よろずや」が一軒あっただけです。

茶だんすの引き出しにスルメや煮干や昆布などが入っていて、スルメをあぶって食べるのがお酒のときのごちそうでした。鶏は年に何回か、飼っている鶏を。でも、家では殺せなくてね。

同級生のお父さんに、犬の毛皮や肉を売っている人がいたの。いっこく者で、ご近所付き合ひもあんまりないような人でした。その同級生はお休みが多かったから、先生に「学級費をもらってきてもらえる？」と言われて、行ったことがあるの。「おじさん、学級費をもらいにきたんだけど」って、ドキドキしながら言ったら、「いくらだ？」とか言って、すぐに

渡してくれた。

意外に優しい人なんだ、って思ったけど、毛皮が干してあるの。大人になってから聞きました。あれは犬の毛皮だった。犬の肉も売っていたけど、気むずかしくて気に入らない人には売らなかつた。ずっと後になって、うちで働いていた人に、「私も犬の肉を食べた？」と聞いたら、「食べた」って。ぜんぜん記憶にはないんですけど。

空襲と食糧難の記憶

戦争の記憶はあまりありません。防空壕があつて、空襲になると、そこに入つたんですが、おじいちゃんだけは「どこにいたって、やられるときはやられるんだ」って入らない。子ども心にすごく心配して、防空壕から出るとすぐにおじいちゃんのところに行つて、寝ているのを見ると安心した、そんな記憶があります。飛行機が編隊を組んで東京のほうへ飛んでいったのを見た記憶があります。焼夷弾は裏の山にもいくつも落ちましたけど、それがきれいなんですよ、あの頃は

景色がみんな灰色だったけど、金紙・銀紙がピラピラ落ちてくる。喜んで拾いに行きました。

石神に爆弾が落ちたとか、戦後、不発弾が見つかつて、その一つが爆発して大騒ぎしたとか、そんなことをかすかに覚えています。

買出しの人が来たという記憶もあまりないですね。庭先にサツマイモの種床があつて、あまつた種芋を「譲って」と言われて、「これはジャリジャリして食べられない」と言ったら、「それでもいいです」って。子どもでも、まずくて食べられないのは知っているので、「どうして？」って、このやり取りは覚えていません。

農家でも、戦争が終わってから五年くらいは麦飯。「四分六で何升炊い」といってとか言われて、お米のほうがおいしいから麦を四、お米を六で炊くと、「そうじゃない、お米が四だ」って言われたり。それが五分五分になって、それからお米が六から七になって、すぐに白米になりました。

小学校時代のお弁当

小学校の頃は、家では麦飯だけど、お弁当は白米。どうしていたかというところ、お米は麦よりも重いから下に沈むの。炊きあがったら、上のほうの麦を除けて、下のお米をお弁当に詰めて、あとは全部をまぜて朝ごはんにする。親心って言うんですか。

小学校のとき、サツマイモを二本、新聞紙に包んで持ってきて、恥ずかしそうに食べている人がいました。私はすごくシヨックを受けたんです。後で同級生に話したら、「子どもにサツマイモを二本、持たせるということは、親はなんにも食べていけないかもしれないのよ」と言われました。

今の栄町に住んでいた人たちは、私たちとは違って、お弁当にタラコとかが入っていました。「それ、なー」と聞けなくて、あとになって、「あれはタラコを焼いたものだ」と気がつきました。私たちはそういうものは食べなかった、卵焼きがせいぜいでした。

栄町のかたは、ほかに文化的なもの

を持ってきてくださったの。授業参観なんてだれも来ないのに、グループで見にいらして、そのあとで茶巾ずしとかクッキーとか、食べたことのないものをいただきます。お子さんたちも、あかぬけていて、みんな勉強ができました。

自由学園の運動会に連れて行っていたことがありますが、片山小学校とは雰囲気がいまいち違うの。文化の違い、育ちの違いというか、そういうのを垣間見ることができました。知らない世界を子どものうちに見せてもらって、とてもありがたかったと思っています。

米軍基地があったことで

近所にアメリカ兵と結婚したかたがいました。可愛い子がいて、学校の帰りから覗いて、ちやうどアメリカ兵があのやっていたんですが、友達と「お人形さんみたい顔をしてるね」って。

今の南栄（みなみさかえ）あたりには絶対に行つてはいけなと言われていました。理由は説明されませんが…。悲しい話では、アメリカ兵に乱暴されて

気がふれた人がいると聞いたことがあります。

うちのおばあちゃんも膝折でアメリカ兵のジープにひかれたんですよ。そのままた村田屋さんの縁台に寝かされていたんです。手術しましたが、膝が曲がらなくなつてしまった。私が五年生のときで、夏休み中はずっと和光の国立病院に泊まり込んで看病しました。

病院での食事はそれぞれ家族がつくるので、同室の患者さんたちに教わりながら私もつくりました。身体の拭き方、水枕の入れ方も、皆さんが褒めてくれるので、喜んでお手伝いして、上手にできるようになりました。

補償がどうだったのか聞いていませんが、戦後間もなくの頃で、アメリカの占領中ですから…。

小学校のとき、クリスマスに米軍のキャンプにある将校クラブに「お呼ばれ」がありました。幌つきのトラックが学校に迎えに来て、アメリカ兵に一人ずつ抱えあげられてトラックに乗せられて、薄紙に包んだオレンジとか石鹸とかいたただ

いて帰ってきました。このときもカルチャーシヨックで、薄紙に果物が包んであるとか、「わあ、トイレに水が出る」とか。お呼ばれは三回くらいだったと思います。

米軍キャンプで、落ちている葉きょうが真ちゆうできていて、くず屋さんに売ると結構なお金になるというので、葉きょう拾いが小学生にもはやっていました。拾った葉きょうはそろばんの袋に入れていて、そろばんをダメにした子もいました。すごいお金になると聞いて、私も親に「葉きょうを拾いに行きたい」と言って、怒られたことがあります。キャンプのなかには将校のゴルフ場があつて、外に出た球を拾ってあげるとお金をくれるというので、拾いに行ってる人たちもいました。

遅く帰って殴られた記憶

町内の行事に映画会もありました。学校や農家の庭に白い幕を張って、むしろを敷いて、座布団を各自が持ってきて。並木さんとか馬場の田中さんとか、私のうちも会場になりました。映したのは時

代劇で、片岡千恵蔵とか長谷川一夫とか。お年寄りがすごく喜んでいました。高校生になると、私たちは映画館にも行っていましたが、お年寄りはそのようなこともなかったのです。

菊池章子の『こんな女に誰がした』という歌が映画になって、高校生になったばかりの頃、それを見に行つたんです。そこで小学校のとき同級生だった男の子に会つて、橋のそばで話し込んだ男の子の。気がついたら月が高く上がっていて、「わあ、どうしよう」とか言っていると、足音がして、ご近所の人五、六人で探しにきたんです。それで、橋のそばに溝があつたから、二人でもぐつちやつたの。「ここにもいないな」なんて言いながら帰って行つたから、私は「じゃあね」と言って、別の道から帰つただけど、家に入ったとたんに父が「どこに行つたんだ」って、軍隊式に七回、叩かれたんです。目から火花が出るというけど、七回目には、ほんとうに出たんです。ふすまのところ倒れて、ちよつと気が遠くなった。

昭和三二、三（一九五七、八）年ですけど、そういう時代だったんです。ただ話をしていただけなのに、大人つて変なふうを考えるのね。それから三か月、父と口をききませんでした。偏見の目で見ること反発したからでしょうね。父は「いかげんに謝つたらどうだ」と言うので、「いやだ」って。

中学校から高校は細田学園で、女子校でした。心配して女子校に行かせたのに、こういうことが起きたので怒つたんですよ。私は、性格でしようね、男とか女とか、意識しないでお話をしていたんですけど。

男女の交際にうるさかった父

ご近所のHさんが早稲田に通つていたんです。バス停で一緒になって、「早慶戦に行かない？」と言うので、あの頃早慶戦は人気でしたから、「行ってもいいけど」とか話していました。

そこに父が車で通りかかつて、帰ってから「Hなんかおしゃべりして」と言うから、「ご近所だから、あいさつくらいす

るでしょう」と言ったら、「あれはあいさつじゃない」って。そんな時代でした。今でしたら、いろいろな人と楽しくお付き合いできるんでしょうけど。

後日談があつて、早慶戦に行くことになって支度していたら、Hさんが迎えに来て、庭を掃除している父に、「信子さんいますか」と聞いたたら、「いないよ」って。出るに出不れなくて、結局、行きませんでした。

父は子ぼんのうち、めったに怒りませんでしたでしたが、異性についてだけは目を光らせていましたね。母は自分の意見は言わないで、「お父さんが心配するからやめなさい」ってよく言うから、私は「お母さんはどうなの、お父さんだけが心配しているの？」って言い返していました。

高校を卒業したあとは東京の果物屋さん勤めて、それから片山農協、そのあと父がやっている不動産会社の事務を手伝いました。同級生は家事手伝いのかたわら洋裁とか和裁、お料理を習ったりする人が多かったですね。私もお料理とお花を習いに東京まで行きました。

進学する人もいて、文化服装学院、家政大学、戸板学園、お茶の水の池坊学院、神田の村田簿記などに通っていました。

祖母の時代のお産

祖母は清水そのといまして、明治三八（一九〇五）年生まれです。私が初孫なので、お産するときとても心配して、病院で産むと言うと、「それはよかった」って安心してくれました。

祖母の頃は、陣痛が来ると畳を上げられちゃったんですって。板の上にむしろとござを敷いてお産をしたらしいんです。床下から冷たい風が吹いてきて、子どもが亡くなったり、お母さんも具合が悪くなる人が多かったそうです。「時代が変わってよかった」って、しみじみ言っていました。

私も自宅で生まれました。朝霞駅の近くにいる野本さんというお産婆さんを頼んでいて、母が「陣痛がきてるから呼んできて」と言ったら、おじいちゃん「そうか」と言いながら、囲炉裏のそばで世間話をしながら煙草を吸っている。母は

痛くて痛くて、「もう来る頃かねえ」と言ったら、「そんなに痛いなら呼んでくるか」って、ようやく立ち上がったそうです。

母は「今か、今か」と待っているのに、そんなにのんきだったらしいです。やっぱり男社会でしたね。私の代からです、病院で産むようになったのは。

夫は四男ですが、事情があつて、しばらく両親と一緒に住む約束で結婚しました。おばあちゃんから、「お舅さんや姑さんが白いものを黒いと言ったら、白じゃなくて黒なんだよ、そう思わないとうまくいかないからね」と言われました。私は「白は白」と思っていましたけど、やっぱり主張すると、意地悪まではされませんが、返ってくるものは多かったですね。

世のなかには「縁の下の力持ち」的な人がいないとうまく回っていかない部分もあるし、そうかといって黙っていると泣いてばかりいることになってしまふし。女性が主張しすぎて、いろんなところでギクシヤクしている面があるかなあと思

ったり。どの程度、主張して、どの程度、譲ればいいのか、その兼ね合いがわからないで、今日まで来てしまいましたけど。

父の相談相手だった母

母の名前は清水みな子で、大正三(一九一四)年三月二日生まれ。朝霞の出身ですが、本郷のお寺に行儀見習いのようなかたちでずっといたそうで、都会育ちなんです。

母は常に父と二人三脚でした。父は昭和四〇(一九六五)年ごろから不動産屋を始めたり、庭先の納屋を改造して水道管のビニールパイプをつくる工場を建てたりして、農業からの転換を図っていました。

母は父の相談相手のようなかたちで、父のいるところには常に母がいました。

人と会うときも一緒に会って、二人で相談して決めていました。女は家にいるのが当然だった当時としては、珍しかったですね。

父は私が高校生のときに町会議員になりました。議員になる人は、地域でなん

となく決まっていくなです。その筋を通さないで立候補して、自分の力で当選する人もいますけど…。

そんなこともあって、とにかく人の出入りの多い家で、いつも、だれかしら来ていました。あるとき学校から帰ると、縁側に父の知り合いのおじさんがいて、おばあちゃんが「信子、着替えたらお酒をお出ししなさい」って。それでコップに八分目くらい注いで、ありあわせのさかなと一緒に持つていくと、「それじゃダメ、お酒はこぼれるほど注ぎなさい」と叱られました。

寄り合いもしょっちゅうでした。夜には父が何人か連れてきて飲んだり。手伝いの人もいましたし、家族だけで食事した記憶がないほどです。

婦人会の会長だった母

母は昭和三七、八年ころかな、片山婦人会の会長をやっていました。生活改善運動というのがあって、お料理の講習とか生理帯を普及するとか。

それから、農家の主婦はなかなか外に

出られなかったもので、連れ出す機会をつくっていました。旅行にも行って、まわりの人から「お母さんのおかげで、いろいろな所に連れていってもらったわ」と、よく言われました。主婦は自分では旅行に出られないけど、婦人会でみんなが行くのに出さないというのも、家の名折れになりますから。

それから、女の人はお小遣いなどなかったじゃないですか。それで、女の人たちで講をやっていたの。一か月に二〇〇円とすると、一〇人で一年間、貯めると、それなりの金額になるでしょ。それで順番に欲しいものを買っていたの。

あるとき、家にとでもしやれた小どんぶりがあって、「どうしたの」と聞くと、講で買ったって。素敵な食器で嬉しかったのを覚えています。女の人が自由に使えるお金は、そうやってつくるしかなくなつたんじゃないですか。でも、こういうこともリーダーになる人がいたからできたことですね。

私は朝昼晩、決まった時間に家族だけでご飯が食べられる、そういうおうちが

うらやましかったですね。お友達の家に行くとお母さんがいて、お茶を出してくれたりしますが、私の家では「自分でやりなさい」。いつも家にお母さんが憧れてました。「年寄りや子どもをおいて、よく遅くまで出ていられるわね」と喧嘩したこともあります。でも、やっぱり自慢の母でした。

結婚した綿谷も事業をしていましたが、会社のことは会社の人がやって、家族が口を出すことはありません。特に女性が商売にかかわることを嫌いました。だから私は「家にお母さん」をやらしてもらいました。

そういう家庭にたくて綿谷と結婚したんですが、やっぱりダメ、合わないんです。人のおもてなしが好きな。父と母の血が流れているんでしょうね。

女が家を空けるといふこと

母は私と妹を連れて、戦争に行っている父に会いに満州まで行ったんです。その頃は、嫁の分際で夫に会いに行ったりすることは、大変なことだったらしく、

家族は大反対で、「不良嫁」と言われたそうです。後で親戚から「あのときはたいへんだったのよ」と聞きました。

母は勇気のある、すごい人だと思えます。でも、その娘は、二泊三日以上の旅行に行きたいって言い出せないの。「ダメ」とは言われないかもしれないけど、おあさん(義母)もずっと家にいたし、女が旅行して家を空けるなど信じられないという人でしたから。

夫も、家のなかでは何をやっても何も言わないけど、外に出るのを嫌がるの。出かけて帰っても、怒ったりはしないけど、気分的に理解がないの。私は外に出るのが好きなので、この気兼ねがストレスになっていきます。祖母たちの時代の歴史を、いまだに背負っているのかしら、それとも思い込みで、自分で自分を縛っているのかしら。

両親がいるときはよく実家に帰りましたが、長居はしませんでした。こちらの家への遠慮です。女って、そういうものなんですか。父の作るお雑煮は特別においしくて、結婚してからも、「お父さんの

お雑煮を食べたくて帰ってきたんだけ」と言っていると、喜んで作ってくれました。今思うと、泊まっておけばよかったな。「女性史」だから、こういうことも言っていないんでしょうね。

女が自由を獲得するには

子どもの同級生のお母さんの話ですが、お嫁に来たときに、米びつの米がならされていて、そこに手の形がついている。嫁に米を自由に触らせないためだったそうです。せつないですね。私の世代が結婚した頃でも、そういうおうちもあったんです。

同級生の話ですが、元旦にお小遣いを一万円もらって、それで一年間、生理用品から何から買っていたんです。代替わりするまでは親がお金を管理するんです。だんなが建前などのちよつとした手伝いをする、そのご祝儀を、ほんとうは親に渡さなければいけないんだけど、こっそり渡してくれて、それでなんとかしているって。お化粧品なんか買えないって、真っ黒な顔をしていました。私の

世代の話ですよ。

でも、案外、思い込みもあつたと思うんです。「二万円では足りないから、もう少しください」と言えば、案外、すんなりとくれたかもしれない。だけど、そう思うまでにすごく時間がかかるし、思ったとしても、言い出すまでに、また時間がかかるんですね。

私の場合、二泊三日以上の旅行に行きたいと言ったら、だんなはすごく嫌な顔をするでしょ。それを押し切って行く勇氣はないんです。でも、昔からのこととして、女が自分で自分を縛って窮屈にしているのかもしれない。

大げさかもしれないけど、これが私にとっては「ベルリンの壁」なんです。やっぱり自分で切り開かなくてはダメなのね。二泊三日の壁を、なんとか突破したいですね。

(聞き取り 平成二三年一月)



シユールな絵を描き続けて

原 ミツル

昭和一六（一九四一）年生まれ
志木市館在住

絵を描き続けた学生時代

山梨で生まれて、小さいときから一人で絵を描いているのが好きでした。小学校、中学校、高校と、勉強のあいまに紙芝居や挿絵、デザイン画などをずっと描いていたような気がします。

中学校では県や市のコンクールに出品するため、絵の教師から「今日は写生だから絵の具を持って出かけるぞ」と、各クラスから一名くらい、授業中に連れて行かれることもありましたね。

放課後はいつも、美術の先生と体育館で畳五枚くらいの絵を描いていました。

井に水彩絵の具を溶いて、ちようどお芝居の背景みたいな絵です。クラブ活動ではなくマンツーマンです。その先生は水彩画で、日本水彩連盟に出品していました。

私はその後油絵を描くようになったんですが、今思えばきっかけをつくったんです。特別扱いといえそうですが、それでしょうが、「あいつは美術室にいるのが当たり前」みたいな感じで、特にいじめられることもなく、自分から進んでみるなど親しくするということもなかったですね。

新座で絵の教室を開く

家族に反対されて美大へは行きませんでした。貿易会社や証券会社で働きながら、銀座のブティックでファッションデザインを習ったり、目白の画材店での裸婦デッサンに通ったりしていました。

昭和四五（一九七〇）年に、新座団地の抽選に当たって引越してきました。子どもが小さいうちに勉強しておかないと、手が離れたときに本格的にできないと思います、人に預けたりして描き出しました。五一年に女流画家美術協会展に出展し、それから上野とか大きな美術展に出すようになりました。その頃は、日本美

術家連盟会館で、夢中で裸婦デッサンをしていました。

昭和五五（一九八〇）年に野火止に越して自宅で教室をもち、そのあと市からの依頼で公民館に講座をつくりました。最初は畑中、そのあと大和田、栄です。それからサークルになって、今は大和田が二つと畑中ですね。当時はよみうり文化センターの川越とか東京電力支社のスペースに、市民の方々の教室をもっていました。

自分の絵は油絵ですが、教室は油絵以外に水彩画、鉛筆画、木炭画、アクリル画などさまざまです。生徒さんの年代はいろいろですが、子どもは中学受験、高校受験になると親がやめさせちゃうのね。でも、やめた子のなかには美大に進んだ子もいたりして、やっぱり嬉しいものですね。

毎年みんなでスケッチ旅行

うちの教室の生徒さんみんなで、毎年バスを頼んで一泊でスケッチ旅行に行っています。去年と今年は奥利根で、五月

の新緑と一〇月の紅葉がきれいな。泊りがけで行って、昼間描いた絵を広間に並べて、みんなで「どうだ」「こうだ」って、合評会ですね。同じ釜の飯じやないけど、ぐっと親密度が増します。

今は写真がよく撮れるようになって、そこから起こそうとする生徒さんも多いんです。昔は「写真のような絵」は嫌われたのね。

でも風景の場合に一番感じるんですけど、現地において山を描こうとすると、すごく山が高いんです。でも写真だと低くなる。それほど写真というのは遠くのもの落ちるんですね。そういう意味もあって、スケッチ旅行に行くようにしています。やっぱり自然の空気のなかで描くと筆が進みますよ。

私の教室も長く続いているので、みんな顔見知りになりましたね。新座市主催で一〇月に行われる「芸術展」（市民祭り文化祭）の前には、ほっとぶらざで教室を全部まとめた展覧会をやっているんです。昔からやっている「ロンド彩輝」という名前を絶やさないようにね。

好きな絵を描いてほしい

「私、全然描けないんですよ、下手で」っておっしゃるかたがいますが、赤ちゃんが生まれて一番最初に描くのって、絵ですよ。字は勉強してから書くもの。落書きはみんな絵ですものね。ですから誰でも描けますよ。

絵を教えるっていつでも、テクニクからしか教えられないんです。素質、資質というのは各人がみんなもっているもので、それなりに表現していく、その手伝いをしていけるようなものです。あと、色彩感覚も個人がもっているもので、他の人が「こうだから」っていうことでもない。

今は仕事をリタイアしたかたが結構みえます。そういうかたには笑い話で言うんです、「みなさんお年なんだから、基礎から勉強するんじゃない、自分はこのうら絵しか描けない、っていう絵を描いてください。描きながら技術的なことはお教えするので、自信をもってください」と。

大作のために空き教室を

美術展に出す絵っていうのは、今でこそ出品人口が多くて、大きい絵はあまり出せないんですけど、昔は一〇〇号（一六二×一一〇センチくらい）は当たり前、三〇〇号（二九〇×二〇〇センチくらい）なんていうのもあったんです。美術館の搬入も大変でしたが、描くのも普通の家では無理。それで一度新座市に、大作を描く人のために学校の空き教室を貸し出してくれないかと頼んだことがあるんです。

議会は通ったんですが、そのあとなかなか進まなくて。結局「持ってきて描いたら、そのたびに持ち帰って」って言われて、それじゃあ意味ないですよ。こういう運動って、いつまでもこっちに情熱があるわけじゃないので、それっきりになってしまい、ちよつと残念でしたね。

人間の裏と表がおもしろい

私の絵はどちらかというと心象画に近く、シニールですね。今は美術館に出す

のも小さくてよくなったので、人物画が多くなりましたが。

日本人はどちらかというと印象派の絵が好きだと思いますよ。日本に来る美術展って、印象派の画家のものが多く、アフリカとかの人の絵っていうと、「なんじや、これは」って全然興味がわかない。風土が違うんですかね。

フランスの美術館に行くと、恐ろしい絵も汚い絵も展示してあります。私は嫌ではないんですけど、一緒に行った人たちは、見たくない、っていう感じですね。私は能面や仮面が昔から好きで、絵にも登場させているんですが、能面なんかもきれいな「小面」ではなく、「小野小町九十歳」なんていうおどろおどろしたものの方がおもしろい、って思っているんです。

こちらが「小面」だとしたら裏側は「夜叉」じゃないですか。嫉妬に気が狂って、徐々に角がのびて、牙がでてきて、それでも目が寂しげ、っていうのが能のなかではよくあるんですが、そういう表と裏、右と左みたいなバランスが好きなんです。

振り子があまり揺れないより、こっちに揺れて反動で向こうに大きく揺れる、陰と陽とか、そういうのが好きなのかもしれない。

年齢とともに絵は変わる

昔描いていた絵はね、おどろおどろしいですよ。もうそれこそ「輪廻とは」とかいながら描いていましたものね。今思うと「それがなんだ」っていう感じですが。ああいう年齢のときは必ずそういう道を通り過ぎるんですね。また次の年齢で違うことを考えて、やっぱり歴史ですね。達観してくると、明るくケロッとしていくじゃないですか。どろどろしたものはしまっておいてね。

人物を描くときに、あんまり人間っぽい顔は描きたくない。どっちかっていうと宇宙人だとか、わけのわからない、性格がいじけるような人の顔がいいかな、と思うんですけど。最近自分がおだやかな顔になっちゃって困ってるの。年とったせいですかね。

デッサンはモデルさんを使いますが、

顔だけは自分のイメージで、全部変えちゃいます。肖像画を描くときも、写真のようにそっくり描くのは嫌ですね。どつか似てるんだけど、克明に似せては描かない。その人のもっている雰囲気とかを大切に、きれいに描いてあげます。

年齢そのままの絵がいい

以前、ほつとぶらざで「ロンド彩輝展」をやったとき、生徒のみなさんが自分の作品と自画像を並べて出したことがあるんです。みなさん、あらが出ないように小さくしてましたけどね。

自画像はね、描く人は毎年描いてますよ。年齢とともに顔が変わってくるのが絵にするとよくわかるんです。苦しいとき、病氣しているときは顔色が違うし、使う絵の具が変わっちゃうの。具合の悪い人は絵の具の色がすごく少なくなる。元気な人ほど多彩。若い作家さんの絵がすごくカラフルなのは若くて元気な証拠ですね。

生徒さんの絵を見て、「最近どうしてこういう色ばかり使うの」って思うこ

とはありますね。本人は気づいていないけれど、いいことがあったのかな、って。大きな流れのなかで変化していくっていうのは人間らしいんじゃないかと思いません。上手でも下手でも、どっちにしても変化したほうが。

年齢を重ねると、頭は冴えてきて、体力は落ちてきて、交差する時期があるじゃないですか。そこからさらに体力が落ちて手がにぶってきたときに、「私、描けなくなつたからやめるわ」ではなく、その年齢はその年齢でいいんだから、そのまんま描いたほうがいい。自分もできればそうしたいと思えますけどね。

男の人と女の人で絵が違う

アンティークドールとか陶器の人形を描く場合、男の方の描いた人形の顔はすぐわかります。女の方は化粧のたびに鏡を見ているので、自分の鼻と目の間隔ってというのが知らず知らずのうちにわかってるんですね。

絵の場合、骨格とか顔の比率っていうのが全部計算されていて、どういふふう

に描くと子どもの顔、どういふふうにくと大人の顔って、一応あるんです。男の人の骨格ってまた違うでしょ。それぞれ自分の見ている顔に近いのを描いちゃうんですね。

女の人は、モデルさんをきれいに描いてあげようとするんですけど、男の人は見たとおりに描こうとする。たとえば頬のそげたところとか、首筋のたつたところとか、皮膚の上にはちよこつと血管が浮いている部分とかをしつかり描こうとするんでしょうね。そういうところが強調されてしまつて、画面がうるさく見えちゃう、ということもあるかもしれないですね。それもその人なりですよ。個性ですものねえ。

山奥にいない限り毎日人と接触しているので、描く、描かないにかかわらずよく見ているんですね。だからちよつと狂うとすぐわかっちゃう。まあ人物画は一生涯勉強っていうくらいむずかしいですね。

白を塗り、そして赤を入れる

絵の具の基本は一二色か二四色で、絵

の具全体で三〇〇色くらいになります。何色も混ぜると本来の色が濁ってしまい、乾いてから汚くなってしまうので、混色は三色が限度ですね。

最初から混ぜるのではなく、ひとつの色を塗って、乾いたらその上にまた違う色を塗る、重色っていうのがあります。たとえば下に白が入れてあって赤い色をうすく溶いてかけるとピンクになる。そこに青をかけると混じったところだけ紫になるというふうですね。

私は、まずキャンバスに白い絵の具を何回も塗ります。キャンバスの白は胡粉(ごふん)の白ですから、絵の具のほうかはるかに白いです。ちょうどネオンサインで、下に蛍光灯が入るとものがきれいにみえるように、発色がよくなるんです。その上に、極彩色になるようにキャンバス全部に色を塗ります。下地は絵の具を結構使うのでとてもきれいですから、それを残しながら描いていきます。極彩色の色が入っているところに塗るので、赤い部分は一〇回以上塗らないと赤にならないんですよ。油絵の具って

うのは下にある色がずっと影響し続けるんですね。完璧に消すまでには相当塗らないと。白いところも、極彩色の上にもた白を塗って、白に戻している。五色から八色くらいの極彩色を全部入れているので、下地だけで一枚の抽象画になっていますね。

一〇〇号とか一五〇号のときは庭にねかせて、一色ずつ井に絵の具とオイルを混ぜて溶かして、ばら撒いていましたね。きれいな格好なんかしてられませんが、赤はよく使いますね。赤をちょこつと使うと気持ち晴れるんです。

搬入口にあわせて描く

絵が描けたから展覧会に出す、っていうのはありえない。前もって来年のいつに出すから決めておいて、その日に合わせて描くんです。逆にいうとお尻に火がつかないと描かない。コンクールに出して審査されるのは新作でないとダメですが、市の芸術展には、具展とかに出したものを「今度は地元で見てもらおう」と出しますね。

どちらかというと、私は描くのは早いんですが、イメージをつくるのに時間がかかります。サーカスの熊みたいにするうろ、一か月くらいやっていますね、まともなくて。

みなさんもそうだと思うんですが、絵に没頭しているときに、次のアイデアが浮かんじやうんですね。こうもいいね、あれもいいね、って。でもなるべく目をつむって、入れないようにしないと、描いている絵のテーマが変わってしまったら、目的がはっきりしなくなっちゃうので。

次のテーマに、ってメモを書いたりしているんですが、それもだんだん忘れて、いざ描くときに、またうろろろして考えるの。その繰り返しかもしれない。

美術館では好きな絵だけを

美術館では、部屋に入ったらさらっと見て、あの絵とあの絵が好きって、そばへ行つて見る。はじから見えていくと、時間がかかるし、何が印象に残ったかわかんなくなっちゃうの。興味のない絵を見

ると、どうしてもあら探しになっちゃう、私ならこうするわ、って。

でも興味のあるのは、「ああ、ここ、こういうふうを描いているんだ」って勉強になるじゃないですか。広い美術館で二つか三つの美術展を見ると、疲れきっちゃいます。原色っぽい絵が多いと目がチカチカしちゃうのね。

フランスに美術館はたくさんあるんですが、絵を年代別に分けてあります。たとえば、ルーブルは古い年代、オルセーは十九世紀後半、ポンピドーは現代絵画というように、同年代に競い合った人たちの絵が同時に見られるんです。私はポンピドーという近代美術館が一番落ち着きますね。波長が合うんでしょうね。

自分の体もキャンバス

「絵描きは自分の体もキャンバスだと思え、自分の体にも絵を描け」ってずっと言われてきたのね。だから普通のおかあさんのような格好はほとんどしなかった。たまに子どもの学校にワンピースとか着ていくと、「熱があるんじゃないの」

って言われました。絵描きさんは変な格好しても、誰もなんとも言わないんですよ。私は「派手すぎて着れないから」っていうのをよくもらいますが、ちゃん到着ますよ。あと大きな帽子を目深にかぶれば、お化粧しなくても大丈夫、便利です。

本名は原充子だったんですが、独立展や女流展に出すようになったとき、「原光子さん」という女子美の先生がいらしたんです。字は違うんですが、サインは同じになってしまふのでまずい、ということになり、「充」はみつるとも読めるので「原ミツル」を雅号にしました。出版社の方にはしょっちゅう男の人と間違われていました。ちなみに現在の本名は森充子です。

描き続けて思うこと

嬉しいのは、新聞で自分の絵が批評されたり、評価されて買っていただけたときですね。最初に頂いた賞のトロフィーが背の高さくらいあったんですよ。嬉しかったですね。あと埼玉に住んでいるの

で、埼玉県美術展で入賞したときも嬉しかった。

残念なのは、離れていってしまう生徒さんがでたときです。旅立ちだと思えばいいんでしょうけど。

でも、二五年間絵の教室をやっていて、長く通ってきてくれる生徒さんが多いこと、自分の絵のファンが増えていくことなど、ずっと描き続けてきて、ほんとによかったと思いますね。

(聞き取り 平成二三年九月)

